

## 「客席と一緒に“生きる”喜び」

～チェロ奏者、吉井健太郎さんに聞く

ウィーン6区のカフェ「シュペアル」は19世紀の雰囲気が残り今も芸術家が集う。初めて会ったウィーン交響楽団首席チェロ奏者、吉井健太郎さんは、老舗カフェにふさわしい静かな風格を漂わせていた。吉井さんは1970年秋、16歳でウィーンに来た。オーストリア日本人会創設は1958年と知った吉井さんは「私より12年も前にできたのですね」と感慨深げだった。

吉井さんは初めて来たころのウィーンの印象を「暗いまちだった」と振り返る。最初に入居したアパートでは楽器を練習する音をいやがられ数日で追い出された。冬には雪が深く積もり、とても寒かった。

音楽一家に育った吉井さんは6歳からチェロに親しんだ。父正幸さんはチェリスト、母輝子さんはピアニスト。音楽留学した吉井さんに続いて、姉の朱実さんもウィーンに来て音楽の勉強を始めた。音楽修行が目的で来たウィーンだったが、自然な流れのうちに長く暮らすことになった。

73年2月からウィーン交響楽団で演奏した。75年にオーディションを受けて東洋人で初めて正式な楽団員となった。合格すると、責任者から「2年も待たせてごめんね」と言われた。当時は女性の楽団員もハープ奏者一人。伝統的なオーケストラには保守的な面もあり、日本人を団員として受け入れるか、組織の中で論争があったらしい。

79年に首席チェリストになった。首席になると定位置が決まるが他のトゥッティ奏者の席に定めはない。「それまでの時代があるから、トゥッティストの苦労もわかる」と言う。時の流れは早く、オーケストラの顔ぶれも代わり国際色豊かになった。ウィーンの町並みも大きく変わった。

「ウィーンの色がなくなっていく」と吉井さんは危機感を抱く。最もウィーンらしい時代は来て間もない70年代だったと思う。

師事したヒューブナー、ヘアツァー。ルイツ、マイスターコースを受けたシュターカー、フルニエ。ロストロポーヴィッチ、バイオリンのオイストラフ、ピアノのミケランジェリ……。著名な音楽家の名前を次々と挙げて「本物の演奏を聴いた。今とまったく違った」と懐かしむ。そして「機械化されない時代のよさがあった」。

パソコンやCD、携帯電話で音を再現できるデジタルの便利な現代は果たしていい



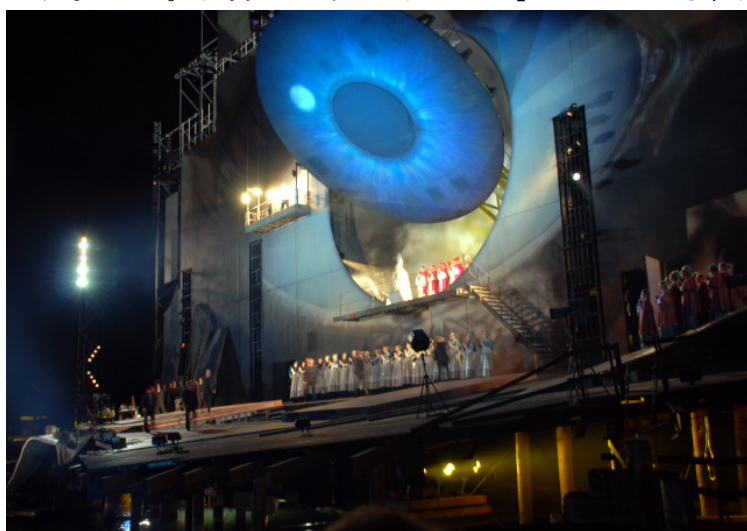
カフェ「シュペアル」の雰囲気に溶け込む  
吉井健太郎さん=2008年7月2日撮影

のだろうか。「本当の意味で、芸術家が生きにくい時代になった」と吉井さん。何もが破壊された戦争の後、復興の時代には「音楽をやる人も、演奏を聞きに行く人も純粋だった。金もうけなんてだれも考えなかった」。

「生の演奏を聴いてくださいね」。吉井さんはそう勧める。コンサートに行けば、楽器を奏でる音楽家に会える。本物があり醍醐味もある。

「道端の花を見て美しいと思うでしょう。それと一緒に。自分の感性に率直に」。音楽との向き合い方を率直に尋ねると、吉井さんはそうアドバイスしてくれた。「どこに咲いても花は花。どこから来た花か。何科に属するか、そんな知識はなくていい」。まわりの批評や評判を気にする必要はなく、実際に直接、生の演奏に触れることから始め、自分で楽しみ方を見つければよいという。

演奏する側の思いを「一緒に楽しむ。客席と一体感を得られたときが最高の瞬間」と表現した。自分で「うまくいった」と思っても、観客席の反応は芳しくないことも



湖上のオペラ「トスカ」=ブレゲンツで08年8月11日撮影

ある。ウィーンの定期演奏会では決まって通ってくる顔なじみの客に会える。知った顔を見つけるたびに「音楽家も観客も一緒に年を取っている」と実感する。一方、日本で演奏会を開くと「お客さんは若い」と感じ、その分将来性もあると受け止めている。

毎年夏はオーストリアの西端の町ブレゲンツの湖上音楽祭で演奏するという。ボーデン湖の対岸はドイツ、スイスだ。

吉井さんの話を聞いているうち、ブレゲンツに行きたくなった。今年8月、家族で7時間かけて列車の旅に出かけた。今夏の演目はオペラ「トスカ」。小雨混じりで気温は低く、夏と思えないほどの寒さで慣れた客は毛布を持ち込んでいた。湖上に浮かぶ舞台は大掛かりで、屋外ならではのダイナミックさだった。

吉井さんは自然や環境に関心を抱く。ウィーンでも地球温暖化は身近な問題だ。かつてドナウ川に氷が張ってスケートできる時代があった。「初めてウィーンに来る時、どんなマント（外套）を買うか迷った。今では考えられない」。そして「北極の氷が溶け続けている。ホッキョクグマがこれから生きていけるだろうか」。そんなことも心配する。

「澄んだ音楽」が吉井さんのテーマだという。いらぬものを省き、澄んだ音を追究し続ける。「音色はよくなるが答えはまだない。だから楽しい」。長年の演奏活動から「生きていることが音楽だ」と語る。音楽の都ウィーンで好きな音楽に向き合い続ける吉井さんから多くのことを学ばせていただいた。

【中尾卓司】